

〔「煌めきの美」展によせて〕

金工品にあらわされた人物文様について

金工品にあらわされた文様から、人々の金工品に対する意識を探ります。

古来、金属器は人々にとって神聖なものであり、殷～周時代の青銅器には饗養や龍、鳥など霊力があると考えられた生き物が文様としてあらわされました。戦国～漢時代の青銅鏡では当時の宇宙観や西王母・東王父といった神仙の姿、霊獣などがあらわされており、人々の日常を反映するというよりも、やはり超絶的な力を有するものがあらわされたといえます。これは青銅器や鏡が単なる煮炊きや容器、また顔を写す実用のためというよりも、祭祀や呪術に用いられたこととも関係しています。しかし、金属が神聖で超絶的な霊力を持つという感覚は、それ以降も長く続くと考えられます。

隋～唐時代には、王族や富裕層を中心に金銀器は権力や富の

象徴として、王への貢献や家臣への下賜にもしばしば金銀器が用いられています(『安祿山事蹟』など)。この時代までにソグド人などを通じて伝わったペルシャやソグドの金銀器やその技術は中国において金工品への情熱を高めるために大きな影響を与えたと考えられています。また、唐時代後半から宋時代にかけては、青銅や鉄・金銀を用いて造仏・造塔を行い、法門寺地下宮出土品に代表されるような奉納品の制作を行うと同時に、宮廷内だけではなく富裕層も盛んに金銀器を用いて飲食し、金銀で身を飾りました。金工品が人々にとってより身近になったことが伺えます。莊嚴や装飾としての役割も担う金工品には宝相華唐草文や葡萄唐草文など装飾性の高い華麗な文様が多く見られ、鏡背文様にも花唐草文や獐狔など西方に由来する動物文があらわ

されます(図1、「銅製貼銀鑲金狻猊文八棱鏡」大和文華館)。しかし鏡が特別な霊力を持つとする考えは残されており、東晋時代の『抱朴子』(葛洪著)には道士が辟邪のために鏡を用いることが記され、唐時代の小説である『古鏡記』(王度著)にも霊力を持つ鏡の話が綴られています。

また、大きな特徴として人物図があらわされるようになることが挙げられます。「鍍金狩獵文六花形銀杯」(展観案内頁参照、重要文化財、白鶴美術館)や西安より出土した銀貼鏡の銀板(図2、西安市第一建築工程公司出土、西安市博物館)などに見られる狩獵文は唐時代初期を代表する文様の一つで、草花の中を騎馬人物が弓矢や投げ縄を持って疾走し、鹿や兎などの動物たちが駆け回る様子があらわされます。狩獵は王侯貴族の嗜みでしたが、狩獵文は生き生きとした当時の風俗を表現するというよりも、ユートピアをあらわす狩獵の場面を描いた文様の系譜に連なっています。そのようなイメージでの狩獵図は、隋の開皇十二年(592)に没した虞弘

の墓(山西省太原市)から出土した大理石製の棺槨にも見ることができます。虞弘はペルシャなども訪れ、ソグド人を管掌する立場にもあった人物で、棺槨のレリーフにはソグド人の姿や儀式的の様子などとともに、騎馬人物と動物が対峙する狩獵図や走獣が数多くあらわされています(図3、太原市晋源区文物管理所)。これらの図像が西域のユートピアをあらわす図像として認識され、唐時代初期の金属器にあらわされたと考えられるのではないのでしょうか。

唐時代末の九世紀以降には、金属器にあらわされる人物は背景を伴うようになり、内容は更に多様になります。「銀製人物図五花形暖盤」(図4、和泉市久保惣記念美術館)の胴部には、六花形の枠が四面に設けられ、それぞれに人物図が線刻されています。笙を吹く人物と向かいあう鳳凰は王子喬が笙を吹くと鳳凰が現れるという『列仙伝』の内容です。このような仙人の図像は、越州窯の青磁など同時代の工芸品にも度々見られます。また、九世紀後半に法門寺地下宮に奉納された「銀製鍍金人物図香宝子」(図5)では、同様に胴部に枠を設けて『二十四孝』に記される郭巨が母を養うために子を埋めようとする場面や王祥が母のために冬の河に魚を捕りに行く場面などがあらわされています。図像には仙人の他に、手本とする人物像も加わり、当時の人々の身近な姿にかなり近づいてきたといえます。

器物は用途によって、あらわされる文様も変わります。その中でも人の姿は最も身近なものであり、本稿はその一端にすぎませんが、文様としての人の姿を追うことで、金属器が持つ役割や人々の金属器に対する意識の変化を考えることもできるのではないのでしょうか。

(図2は『西安文物精華 金銀器』西安市文物保護考古所、2012年、図3は『中国☆美の十字路』展図録、2005年、図5は『皇朝秘寶 法門寺地下宮與大唐文物特展』国立歴史博物館、2010年より転載させていただきました。
瀧朝子)

図1



図2



図3



図4



図5



季刊 美のたより No.185

平成26年1月5日

発行 大和文華館